

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：13201

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K18435

研究課題名(和文)「インテグリティ倫理学」創出に向けた実践的研究：高度科学技術社会のミニマム倫理学

研究課題名(英文) Practical Research for the Creation of an "Integrity-based Ethics, IBE": Minimum Ethics in an Advanced Science and Technology Society

研究代表者

宮島 光志 (MIYAJIMA, Mitsushi)

富山大学・学術研究部薬学・和漢系・教授

研究者番号：90229857

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は生命倫理と研究倫理を架橋する統合教材の開発であり、教科書『新版 薬学生のための医療倫理』の刊行が実現した。同書の「医療人のプロフェッショナリズムと社会的責任」「レギュラトリーサイエンス」などの項目では、医療倫理と研究倫理を包括する「インテグリティ」理念の重要性が明快に説かれている。また本研究に基づいてオンデマンドの動画教材「研究活動における生命倫理：インテグリティの3原則」が開発された。この講義では「研究活動のインテグリティを追求する」「研究データのインテグリティを確保する」「研究対象者のインテグリティを尊重する」という3原則が統合的に解説されており、高い学修効果が期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代日本社会は高度科学技術を基盤としており、一方では専門化により優れた成果を挙げているが、他方では細分化にともない「全体性の喪失」という悪弊を生んでいる。医療現場でも技術の高度化により新たな倫理問題が生じている(生殖補助医療、終末期医療など)。

ユネスコ『生命倫理と人権に関する世界宣言』の第6原則(第8条)は「人間の脆弱性と個人のインテグリティの尊重」であるが、本研究は「個人のインテグリティ」理念を導きとして、高度科学技術社会に相応しい新たな人間像を探究した。そして医療系の研究教育における「全体性の喪失」を緩和し、全人的な教育を展開する基本理念を「インテグリティ3原則」として呈示した。

研究成果の概要(英文)： The aim of this research was to develop integrated teaching materials that cross-link bioethics and research ethics, and the publication of the textbook "Medical Ethics for Pharmaceutical Students, New Edition" was realized. Items such as "Professionalism and Social Responsibility of Medical Professionals" and "Regulatory Sciences" in this book clearly explain the importance of the concept of "Integrity" that covers biomedical ethics and research ethics. Based on this research, the on-demand video teaching material "Bioethics in Research Activities: Three Principles of Integrity" was developed. In this lecture, the three principles of "Pursue the integrity of research activities," "Ensure the integrity of research data," and "Respect the integrity of research subjects" are explained in an integrated manner, and high learning effects are expected.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：インテグリティ 誠実さ 個人の統合性 プロフェッショナリズム 生命倫理 研究倫理 グローバル・バイオエシックス ユネスコ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

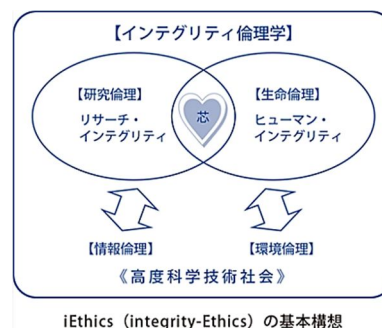
(1) 数年前から日本社会でも様々な分野で「インテグリティ」が語られるようになった。例えば「スポーツ・インテグリティ」や「データ・インテグリティ」であるが、これらも一般市民には疎遠に思われることであろう。ちなみにビジネス界では P.F.ドラッカーの経営学に由来する「インテグリティ」が「真摯さ」と邦訳されて注目されてきた。そして今日、様々な業界で各種の不正が表面化する社会情勢の中で、「誠実さ」「高潔さ」を意味する「インテグリティ」が「コンプライアンス(法令遵守)」や「リーガルマインド(適法性の意識)」以上に日本社会で話題になっている。だが、音訳語「インテグリティ」では、広く市民に浸透しないようである。

(2) 同様のことが大学社会にも当てはまる。各種の研究不正が横行することに対する危機感から、国を挙げて「研究公正(Research Integrity)」の推進が図られている。ところが、一般に研究者は「インテグリティ」本来の意味に思いを致すことなく、もっぱら既定の「ルールを守る」ことすなわち「コンプライアンス」として「研究公正」を理解している。だが、それは「最低限の要求」にすぎず、本来の「研究倫理」には一定の「倫理観」が必要となる。そうした具体的な「倫理観」の1つに「インテグリティ」があると考えて、本研究は立案された。

(3) 現代の日本社会は高度科学技術を基盤としており、その光と影の両面が見られる。研究と教育について見れば、一方では分野を問わず専門化・高度化が奏功して優れた成果を挙げているが、他方では探求の細分化にともない、「全体性の喪失」や「核心部の曖昧化」という悪弊が生じている。それは特に「人間」を扱う研究と教育で著しく、医療現場でも技術の高度化によって新たな倫理的問題が顕在化している(生殖補助医療、終末期医療など)。こうした情勢を見据えて、ユネスコ(UNESCO; 国際連合教育科学文化機関)は『生命倫理と人権に関する世界宣言』(2005)を公表し、生命倫理に関する議論の普遍的な枠組み(全15原則)を示した。その第6原則(第8条)は「人間の脆弱性と個人のインテグリティの尊重」であるが、本研究は特に「個人のインテグリティ」理念に触発されて、高度科学技術社会に相応しい新たな人間像を探求し、特に医療系の研究教育における「全体性の喪失」を克服するという課題を立てた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は生命倫理と研究倫理に共用可能な教材(仮称「インテグリティ倫理学」)の開発を当初の目的としていた。「インテグリティ/integrity」概念をめぐるのは、生命倫理で「ヒューマン(ないしパーソナル)・インテグリティ」が、研究倫理で「リサーチ・インテグリティ」が、別個に話題となってきた。本研究は《インテグリティ(統合性)》を欠き、両断された旧来のインテグリティ論を根本から見直して、両者の《芯(コア)》(右図)を追求する実践的な試みである。《インテグリティ概念のインテグリティ(統合性と求心力)》を基軸とする教材開発という目的がそこに具体化された。



(2) 上記の目的を超えて、さらに《高度科学技術社会に必要なミニマム倫理学》を提唱することが本研究の最終的な目論見である。本研究を遂行する上で「インテグリティ/integrity」概念とその周辺に関する「言葉(翻訳語を含む)の詮索」は不可欠である。だが、本研究はそうした言語論的な次元を超えて、高度科学技術社会における日本と欧米の規範意識(誠実さ・健全さなど)を比較検討することを目指す。そして科学技術と研究開発における自己規制(自律)の問題を「人間理解(人間観・人間像)」の面から哲学的に基礎づけることも射程に収めている。

(3) 研究倫理と生命倫理の分野では半世紀以上にわたり、世界医師会と米国の学界を中心として基礎理論が構築され、各種の改訂がなされてきた(ヘルシンキ宣言、ベルモント・レポート、生命医療倫理の4原則など)。その後さらにヨーロッパ流の生命法4原則(バルセロナ4原則)が示され、以上すべてがユネスコの生命倫理15原則に集大成されていると見てよい。生命倫理と環境倫理を包括するユネスコ15原則はわが国では広く流布しておらず、第6原則(第8条)「人間の脆弱性と個人のインテグリティの尊重」に対する理解も不十分である。本研究はそうした停滞状況を乗り越えるために、人間観の核心を成す「個人のインテグリティ」理念の解明を主たる目的の1つに設定した(この理念はヘルシンキ宣言にも一貫して盛り込まれている)。

3. 研究の方法

(1) 本研究が掲げる《ミニマム倫理学》構想は、研究倫理と生命倫理の現場に必要な知識や態度に関する細目に目配りをしながらも、差し当たり両者の「全体像(輪郭)」と「核心」に狙いを定めている。したがって、扱う問題圏の適切な図式化(明解なモデル化、部分と全体の

構造化、大局観)が求められる。各種文献で複雑に論述(言語化)された倫理的な事柄を独自の仕方で図式化することにより、聞き手に「生き生きとしたイメージ」を喚起させ、事柄(本質)に対する理解をおのずと深めてもらう手法は、本研究(教材開発)の主要な方法論である。

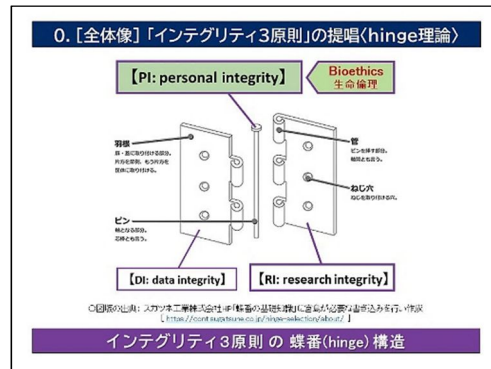
(2) そうした「図式化」と併せて、本研究は主に「概念史」の方法によって遂行される。すなわち、現代の「リサーチ・インテグリティ」は「インテグリティ=誠実性・公正さ」を基礎概念としており、ヨーロッパの知的伝統に照らせば、徳倫理学 例えば良心論 の流れを汲んでいる。それに対して「パーソナル(ないしヒューマン)・インテグリティ」は「インテグリティ=統合性・全人性」を基礎概念としており、やはりヨーロッパの伝統的な人間観 「小宇宙」としての人間 にまで遡りうる。こうした《インテグリティ概念の二義性》は随所で概念上の混乱を招き、訳語の選定が懸案となっている(翻訳の壁)。しかし、そこに「インテグリティ」概念の豊穡性を見て取り、《逆転の発想》によって、研究者の「良心」に関わる「研究公正」の問題と「心身合一」や「人生の物語」を踏まえた「全人的医療」の問題を《トータルに見据える視座》をそこに模索するという隘路を 困難を承知で 本研究は敢えて歩むことにした。

(3) より具体的な作業として、本研究は、わが国の全般的な知的現状を批判的に分析しながら、「インテグリティ」をめぐる《知の組み換え》を目指した。すなわち、既存の教科書類で立項された各種項目を吟味検討して、それらを改めて「インテグリティ」の視点から捉え直してみた。他方でまた、学際的な連携と協働の推進を図るために、各種の学会や研究会などの機会を捉えて様々な研究者と「インテグリティ」構想について意見を交換し、《高度科学技術社会のミニマム倫理学》を創出の是非について意見を聴取した。最後にまた、教育実践(講義活動)の場でも、学生たちの反応(コメント)を確認しながら、本研究開発の成否を折に触れて検証してみた。

4. 研究成果

(1) 最終年度(延長期間1年)に本務校で修士課程用のオンデマンド動画教材を開発した。すなわち、講義「研究活動における生命倫理：インテグリティの3原則」(富山大学大学院共通科目「研究倫理」)の中で、独自に「インテグリティ3原則」(リサーチ・インテグリティ、データ・インテグリティ、パーソナル・インテグリティ)を展開した。そのさい「蝶番の模式図」(右図：hinge理論)を提示して、聴講者の理解を深める工夫を凝らしてみた。

なお、「インテグリティ3原則」とは下記の通りで、第3原則によって研究倫理と生命倫理が連結される。

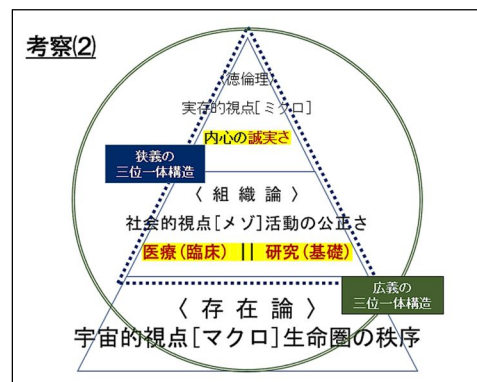


研究倫理と生命倫理をつなぐ《インテグリティ3原則》

- [第1原則:RI] 研究活動のインテグリティを追求する (シンガポール宣言など)
- [第2原則:DI] 研究データのインテグリティを確保する (FDAのALCOA原則など)
- [第3原則:PI] 研究対象者のインテグリティを尊重する (UNESCOの第6原則など)

(2) 《生命倫理と研究倫理を架橋する統合教材の作成》という最終目的の達成に努めて、当面の成果として、薬学倫理の教科書『新版 薬学生のための医療倫理』を刊行した。同書の「医療人のプロフェッショナリズムと社会的責任」「レギュラトリーサイエンス」「(リード文)臨床研究の倫理」など幾つかの項目では、医療倫理と研究倫理にわたる「インテグリティ」理念(人間の統合性、研究の誠実さ)の重要性を簡潔に説いており、清新な内容となっている。

(3) 「インテグリティ」理念の哲学的-言語論的研究は、口頭発表「インテグリティ原則の三位一体構造について グローバル・バイオエシックスからの考察」に結実した。H. ten Have (ed.), *Encyclopedia of global bioethics*[=EGB], 3 vols., Springer International, 2016 にはインテグリティ関連の3項目が詳述されている。それらを読み解いて独自に構造化した成果が、右の模式図(考察②)である。次いで口頭発表「インテグリティ概念と生命倫理学 文化の翻訳可能性をめぐって」では、「インテグリティ」を論じる際の諸困難を、過去の関連資料を俎上に載せながら、用語法と翻訳の問題として掘り下げた。

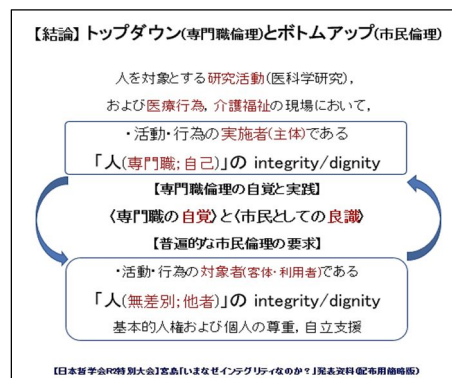
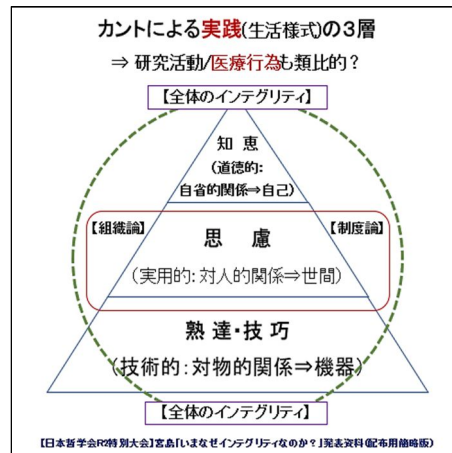


(4) 口頭発表「いままぜインテグリティなのか？」では、カントが提示した「実践の3形式」を枠組みとして、謂わば「インテグリティの統一理論」を構造化してみた。すなわち、カントに倣って人間の実践（生活様式全般）を「熟達（技術的）」「思慮（実用的）」「知恵（道徳的）」の3層に区分して、多様な「インテグリティ」論を再配置する試みが展開された（右図を参照）。そして、大方のインテグリティ論は実用的な「思慮」に関する言説であり（マネジメント論、ガバナンス論）だからこそ広く世間の支持を得ているという事情を示した。

その上で、本発表ではそうした言説の意義と併せて、その限界を吟味した。例えば「研究公正（Research Integrity）」の場合、一般に「研究者として信頼されるためには...すべし/すべからず」の教育や研修が先行しているが（カント的には「仮言命法」）、はたして「研究倫理」がそれで事足りるのかを批判的に考察した。

そして最終的には、専門職倫理（医療倫理や研究倫理を含む）は、「プロフェッショナルリズム」教育に見られるトップダウン方式と併せて、ボトムアップ方式による広汎な「市民倫理」教育と相互補完的に連携する必要がある、と結論づけた（右図を参照）。

このモデルは別の口頭発表「人間のインテグリティを考える カントの性格概念を導きとして」では、新たにカント人間学の「性格」概念と擦り合わされた。そして現代の「パーソナル・インテグリティ」理念について、哲学的な含意を浮き彫りにした。なお、『カント伝』の書評では、最晩年のカント像を「脆弱性」の観点から読み解く方向性を示唆して、人格理念の再考を促した。



(5) 研究分担者の遠藤寿一は、研究期間全体を通じてもっぱら「死の多元論」に焦点を絞って、人格の「インテグリティ」に関する精緻な考究を展開した。その最終到達点は論考「死の多元論の擁護に向けて」であり、先行する「死の基準」に関する2編をダイジェストした上で、新たに「顔」の論点を加えてまとめられた。すなわち、第1論文「私たちの死、動物主義、ナラティブ同一性 インテグリティの観点から」では、ドゥグラツィアの実存論と実践的関心を統合する意味で、「インテグリティ」の観点から死の基準を考える可能性を吟味した。第2論文「死の多元論とインテグリティ」では、シェヒトマンの「人格的生の観点」に依拠して、人の死の基準を生物学的・心理的・社会文化的な諸特性の統合（インテグリティ）という観点から、トータルに考察する可能性を論じた。冒頭の第3論文では、それら2つの可能性を踏まえながら、いっそう具体的に、「顔」という現象に即して「人の死」をリアルに捉える方向性を示した。

(6) 以上の(1)から(4)を展開する途上で、研究代表者(宮島)は「インテグリティ/integrity」に関連する国内外の各種文献と資料を渉猟し、その「内包と外延」を多角的に分析した。しかし、最終的にその成果を独立した研究論文として公表するには至らず、すべては今後の課題として残されている。だが、例えば、世界医師会の「ヘルシンキ宣言」、eAPRIN が提供する各種の研究倫理教材、Web版のStanford Encyclopedia of Philosophy などについて、「インテグリティ/integrity」および関連する諸概念を詳細に検討しながら、当初の予想通り「インテグリティ/integrity」の「豊饒性」と併せて、大きな「問題性」も目の当たりにさせられた。

わが国でも近年、ようやく研究と教育の全体を包括する「アカデミック・インテグリティ」の重要性が真剣に議論されるようになった。他方で「SDGsの推進」と「データ・サイエンス(DS)の拡充」は、大学教育における喫緊の課題である。国連が掲げるSDGsはユネスコの「生命倫理15原則」と密接不可分であるから、後者の第6原則「人間の脆弱性と個人のインテグリティの尊重」は、《最も基本的な人間像》として、教育的な意義も大きい。また「データ・インテグリティ」に対する意識が「データ・サイエンス」の健全な発達には不可欠である。

そうした《インテグリティ理念を核とする応用倫理学の十全な展開》という構想は、ようやく緒に就いたばかりである。今回の挑戦的研究(萌芽)については、国内外の幅広い現地調査はもとより、国際的で学際的な対話も実践できず、もっぱら文献調査と国内の限定的なインタビュー調査に終始した。しかしその分、潤沢な研究資金を国内外の図書購入に充てることになり、特に海外の高価な「integrity関連図書」を網羅的に取り揃えることができた。今後それらの資産を有効活用して、時間の許す限り、上述の構想を実現してゆきたい。国内外の諸方面からも、富山大学附属図書館所蔵の「integrity関連図書」に注目して、複写や貸借を申し込んで頂きたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮島 光志	4. 巻 7
2. 論文標題 インテグリティ概念と生命倫理学 文化の翻訳可能性をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 生命倫理・生命法研究資料集（芝浦工業大学）	6. 最初と最後の頁 169-192
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 寿一	4. 巻 56
2. 論文標題 死の多元論の擁護に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩手医科大学教養教育研究年報	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮島 光志	4. 巻 37
2. 論文標題 高齢者の社会参加と地域社会の幸福度 フレイル予防の倫理的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 医学哲学 医学倫理（日本医学哲学・倫理学会編）	6. 最初と最後の頁 95-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 寿一	4. 巻 54
2. 論文標題 死の多元論とインテグリティ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 岩手医科大学教養教育研究年報	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 遠藤 寿一	4. 巻 53
2. 論文標題 私たちの死、動物主義、ナラティブ同一性 インテグリティの観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岩手医科大学教養教育研究年報	6. 最初と最後の頁 19-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮島 光志	4. 巻 20
2. 論文標題 〔書評〕マンフレッド・キューン著、菅沢龍文・中澤武・山根雄一郎訳『カント伝』(春風社、2017年)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本カント研究(日本カント協会編)	6. 最初と最後の頁 139-141
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件(うち招待講演 5件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 人間のインテグリティを考える カントの性格概念を導きとして
3. 学会等名 カント研究会 2021年度3月例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 インテグリティ概念と生命倫理学 文化の翻訳可能性をめぐって
3. 学会等名 京都生命倫理研究会 2021年度12月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 インテグリティ原則の三位一体構造について グローバル・バイオエシックスからの考察
3. 学会等名 日本生命倫理学会第33回年次大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 自らの「生涯」を見定めて生き抜くことの困難 盛永著『認知症患者安楽死裁判』に寄せて
3. 学会等名 第2回インテグリティ倫理学(i-E)フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 いまなぜインテグリティなのか？
3. 学会等名 日本哲学会第79回臨時大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 インテグリティ倫理学の構想と展開
3. 学会等名 名古屋哲学研究会 2020年度第1回日本思想史部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 「倫理学の遠隔授業」と「遠隔授業の倫理学」 教育研究のインテグリティ を考える
3. 学会等名 日本倫理学会第71回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 三木清の 中間者の哲学 と共生の思想 東洋的ヒューマニズム理念の可能性
3. 学会等名 名古屋哲学研究会 2019年度第3回日本思想史部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮島光志
2. 発表標題 桑木厳翼とカント哲学 「復興の哲學」(1924年)再読
3. 学会等名 日本カント協会第45回学会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 H・ヨーンズの不可侵性(Integritæet)概念について
3. 学会等名 第1回 インテグリティ倫理学(i-E)フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 医療系委員(会)に必要な「3つのインテグリティ」
3. 学会等名 カメイクリニック 2 認定再生医療等委員会 倫理講習会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 中間者の哲学から integrity の倫理学へ 三木清の遺産を継承する試み
3. 学会等名 北陸宗教文化学会 第26回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 生命倫理学と“Integrity”理念 問題の見極めと日本的な展開に向けて
3. 学会等名 京都生命倫理研究会 2019年度9月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 医療倫理のグローバルな展開に向けて integrity 原則と地域包括ケア
3. 学会等名 富山県泌尿器科医会 倫理講習会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 研究活動における生命倫理 3つの“ integrity ”から掘り下げる
3. 学会等名 2019年度 富山大学大学院 研究倫理セミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 宮島 光志
2. 発表標題 高齢者の社会参加と地域社会の幸福度 フレイル予防の倫理的考察
3. 学会等名 第37回日本医学哲学・倫理学会大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 松島 哲久、宮島 光志（以上、編著）；（分担執筆：遠藤 寿一）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 178
3. 書名 新版 薬学生のための医療倫理	

1. 著者名 盛永 審一郎、松島 哲久、小出 泰士（以上、編著）；（分担執筆者：宮島 光志）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 338
3. 書名 いまを生きるための倫理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「iEthics(インテグリティ倫理学)の基本構想」に関する図版
<http://www.pha.u-toyama.ac.jp/research/laboratory/ethics/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	遠藤 寿一 (ENDO Toshikazu) (00201963)	岩手医科大学・教養教育センター・教授 (31201)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 協力者	盛永 審一郎 (MORINAGA Shinichiro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------